

Y-11-4

京都府入院医療コントロールセンターの役割と活動

京都第二赤十字病院 救命救急センター 救急科¹⁾、
京都第一赤十字病院 救命救急センター 救急科²⁾

○石井 亘¹⁾、宮国道太郎¹⁾、竹上 徹郎²⁾、高階謙一郎²⁾

COVID-19感染症がパンデミックにある現在、日本においても行政や医療機関が様々な対応を継続して行っている。京都府では令和2年3月27日より入院医療コントロールセンターが設置され、各保健所で健康観察を行った新型コロナウイルス感染症患者の病態把握、受け入れ病院調整、搬送調整や宿泊療養入所調整、また新型コロナウイルス陽性者の救急要請の搬送先選定などの業務が開始された。フェーズが変わるにつれて、その業務を拡張しており、入院病床の逼迫時には一時的に酸素投与などを行う入院医療待機ステーションを第5波で立ち上げ、その入所調整を行ってきた。通常は、新型コロナウイルス感染者の調整に関しては、通常保健所管内で入院調整を行うが、地域毎で行うと限られた受け入れ病床を有効に活用できないなどの弊害があるため、京都府では早期から医師（当初は統括DMAT隊員）を配置したコントロールセンターで重症度に応じた受け入れ調整などを24時間対応している。しかしながら、第5波・第6波と陽性患者が増えるに従い、経時的に受け入れ病床が増えているにもかかわらず、非常に逼迫した状況になり、結果として入院が必要な高齢者や基礎疾患のある陽性者が自宅待機を余儀なくされる結果となった。ワクチンや様々な治療薬などが開発され、我が国でも使用しているところであるが、重症化を起す場合もあり、入院医療コントロールセンターの運用は現在も継続している。今回、京都府における入院医療コントロールセンターの役割とDMATとしての2年間にわたる入院医療コントロールセンターでの活動について報告する。

Y-11-6

COVID-19 軽症と中等症以上を区別する簡易スコアの作成とその検証

唐津赤十字病院 内科

○下田 慎治、佐藤 智則、井上 周、原口 哲郎、宮原 正晴

【目的】当院は佐賀県北部医療圏に位置し地域COVID-19入院の大半を受け入れてきた。2020年4月から2021年9月の第1.5波を経験し、18歳以上酸素不要で入院した軽症あるいは中等症1の304例が退院時に軽症で止まる142例と中等症1以上へ進展する162例を区別する予後予測簡易スコアを開発した。すなわち (1) 発症から入院までが3日以上、(2) 重症化予測因子が2個以上、(3) 入院中のCRPが最も高い時点で1.25mg/dL以上、の3項目中1項目以上満たした場合に感度89.5%、特異度64.8%で中等症以上への進展が予測できた。そこで本スコアの有効性を第6波で検証した。【方法】2021年12月から2022年4月まで当院に18歳以上の軽症あるいは中等症1で入院したCOVID-19 224例を対象とし上記 (1) (3) スコアを計算した(当院倫理審査承認番号2021年度10-2)。【成績】第6波では176例が軽症に止まり48例が中等症以上で退院した。簡易スコア感度93.8%、特異度38.1%であった。第6波では患児同伴入院COVID-19陽性父兄27例は患児同伴入院と介護施設からの入院を除いた166例(最終診断軽症:129例、中等症以上:37例)を用いて簡易スコアの有用性を検証すると、感度97.3%、特異度34.1%であった。【結論】1.5波で開発した簡易スコアが第6波では感度高く特異度低い理由として、第6波では入院患者背景が異なる以外に、抗ウイルス剤や中和抗体療法の普及や、比較的軽症で止まることが多いオミクロン株による感染であったことなど様々な条件が1.5波と異なることなどが挙げられた。ただし中等症以上に進展するリスクがある症例を可能な限り広く囲って先制治療を行う、という観点からは優れたスコアであると考えられた。

Y-11-8

COVID-19 に対する胸部X線撮影時における診療放射線技師の感染リスク低減への試み

神戸赤十字病院 放射線科部

○上江 孝典、辻本 梨香、浅妻 厚

【背景】当院では、発熱外来・救急外来において、COVID-19疑い患者から陽性確定患者まで、肺野の浸潤影などを評価する為に、自立歩行不可患者に対して胸部X線撮影(以下胸部撮影)を行ってきた。胸部撮影は、患者上半身を持ち上げFPD (Flat panel detector) を患者背中側に挿入し位置調整などを行う必要があり、患者に直接触れなければならない場面が多く、患者と一定の距離を確保する事が難しく感染リスクが高い検査である。そこで、感染リスクに対応する為に、整形領域等の臥位撮影に使用される臥位ブッキー撮影台(以下:撮影台)に着目した。撮影台は、FPDを撮影台内部に事前準備する事でFPDを挿入する事無く撮影が可能となる。【目的】撮影台を用いて胸部撮影を実施する事で、診療放射線技師の感染リスク低減に繋がるか検討する。【方法】FPDを挿入する撮影台をA法、撮影台を用いた撮影をB法とし、模擬患者(人形)を使用して、X線検査室への患者搬入・胸部撮影・患者搬出までを診療放射線技師5名を対象に、胸部撮影シミュレーションを2回(A法とB法)実施し、以下の3項目の測定を行い平均値について比較検討した。1) 患者と撮影技師の顔面の必要接近距離 2) 患者への直接介助回数 3) A法とB法の実施時間【結果】A法とB法の比較では、1) 42±9cm vs 60±9cm (p<0.05) 2) 4±1回 vs 0回 (p<0.05) 3) 70±10秒 vs 71±7秒 (p=0.4) であった。【結論】B法では、ストレッチャー上のトランスフォーマットレスを使用し撮影台への移動と患者の体位調整が出来る為、患者に直接触れる事無くA法より患者と距離を保ちながら撮影できる事がわかった。また、実施時間に有意差は認められない為、患者を撮影台に移動させる事による実施時間への影響は少ないと考えられる。今回の検討よりB法を用いて胸部撮影を行う事で、診療放射線技師の感染リスク低減に繋がる事が示唆された。

Y-11-5

外来におけるCOVID-19 疑い患者への入院対応～入院時チェックリストの作成～

仙台赤十字病院 看護部 外来

○猪狩 代子、佐藤 郁子、鈴木 由美

【はじめに】当院でのCOVID-19疑い患者のPCR検査は県の依頼で実施し、翌日以降に結果が判るため(2020年6月時点)、感染疑い患者の入院は、判定まで陽性者として隔離対応する。感染対策に患者や家族の戸惑いは大きく、説明や対応には十分な配慮が求められる。外来看護師は入院時の患者・家族への説明や書類の取り扱いに不備・不足がないか、手順に不安があった。【目的】感染疑い患者の入院時、外来看護師が患者・家族への説明と感染予防に留意した安全で円滑な病棟申し送りができるようにチェックリストを作成し、その効果を明らかにする。【方法】2020年6月、新型コロナウイルス院内感染対策のもとチェックリストを作成、7月から使用し、現状に合わせ4回修正した。6か月後の2021年1月、独自で作成した無記名自記式調査を外来看護師36名に実施、結果は単純集計した。書面にて倫理的配慮を明記し、提出をもって調査協力への同意とした。当院看護研究倫理委員会の承認を得た。【結果】患者と対面し入院準備から申し送りまで行った看護師は86%、患者と対面せず、家族対応や書類準備を行った看護師は67%、その全員がチェックリストを使用していた。チェックリストを使用しなくても入院準備が「できる」「だいたいできる」が39%であり、すでに複数回使用したことのある看護師だった。使用すれば「だいたいできる」が94%あり、「確認しながら準備できて助かった」「準備に不安な中で心強い」「申し送りの不備が減った」等の意見があった。外来看護師の入院時の不安軽減と安全で円滑な申し送りに繋がった。【おわりに】刻々と変化する感染状況により患者対応も都度変化している。今後、入院時の患者対応をより安全で安心できるものにするため病棟とより良い連携を図っていく。

Y-11-7

新型コロナウイルスワクチン接種における当院での運用と薬剤師の関わり

大森赤十字病院 薬剤部¹⁾、

大森赤十字病院 看護部²⁾、大森赤十字病院 検診部³⁾、

大森赤十字病院 新型コロナワクチンプロジェクトチーム⁴⁾

○大橋 啓子¹⁾、高田あゆみ^{1,4)}、川村 千穂^{2,4)}、神原かおり^{3,4)}、平岩 知子^{1,4)}

【目的】当院では2021年4月からCOVID-19に対するワクチン接種が開始され、職員、かかりつけ患者のみならず、地域住民や近隣の医療従事者等地域医療支援病院として幅広く接種を行ってきた。しかし新しいmRNAワクチンは保管条件や調製方法、アナフィラキシー等の注意点も数多く挙げられていた。実際にアナフィラキシーや副反応だけでなく、管理不足や誤調製による不適切投与や廃棄の報道も数多くされていた。これにより接種者が抱く不安やストレスも大きかった。その為医師や看護師等とのチームの中で薬剤師がこれらの解消の為に果たし得る役割を検討し実践した。今回その内容と成果について報告する。【方法】薬剤師の関与した項目は以下の通りであった。＜接種開始前＞医師と共にワクチン接種に関する院内研修会を実施、ワクチンQ&Aを作成、番積方法の手法に関するDVD作成、ポリエチレングリコール等が含有される医薬品リスト作成＜在庫管理＞冷蔵庫の在庫表と期限・ロット管理＜調製時＞調製者(看護師)への手法や手順の説明、ダブルチェック＜投与時＞医師や接種者からの問い合わせ対応、患者配布資料の作成と掲示、受付事務職員とのキャンセル状況の把握、会場環境整備・誘導【結果】これらの活動により、2021年10月末時点で延べ12,729回の接種を実施し、廃棄は9本に抑えられた。またヒヤリハット事例はあったが、不適切投与は0件であった。帰宅後不安を訴えた方は特に見られなかった。【結論】mRNAワクチンは新規の薬剤で未知の部分も多く管理も複雑であった。準備期間も少ない中、薬剤師が積極的に介入する事は、安全かつ適切な接種と管理に繋がると考えられた。

Y-11-9

寄付による個人防護具の有効活用

石巻赤十字病院 事務部 医事課

○大向 紀江、松本 亜紀、松本 裕樹、小林 道生

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、国、自治体、企業などから多くの感染対策に用いる個人防護具の寄付があった。主にマスク・ガウン・手袋・フェイスシールドが贈られてきた。寄付品の多くは当院で採用されていない商品がほとんどであった。使用方法が複雑、サイズが様々、ウイルスに対する防護性が不透明であるなど、院内で安全に使用するために多くの問題点が発生した。更に、届く寄付品の量が多くの保管場所の確保に苦慮した。大量の寄付品が贈られてくる反面、元々採用品であった個人防護具が生産国のロックダウン、需要増加による影響を受けて入手困難となり、さらに価格の高騰が起こった。当院では、管財課と感染管理室および新型コロナウイルス対策本部が協力し、大量の寄付品を有効活用しながら採用品の確保に取り組んだ。その結果、医療現場への供給は一度も途切れる事なく、備蓄および院内発生時の初動に必要な物品を確保することができたため、この一連の活動について報告する。